

安心・安全・安楽な生活を保証する ～ともの家 運営基本方針より～

〒790-0101 松山市溝辺町甲 94

【Tel】 089-977-8502 【Fax】 089-907-8504

【E-mail】 tomo-home@triton.ocn.ne.jp 【Home Page】 <http://www.tomonoie.jp>



25年度実践研究発表 総評

総合管理者 永和淑子

加齢と症状の進行とで高齢者の生活は、前途に危機が待ちかまえている。転倒事故による骨折と寝たきり、嚥下困難と胃ろう、医療関与の不可避……。今年度の実践研究発表は、これらの課題に直面した各チームがリーダーを中心に、日常的に取り組んだ結果、例年以上に充実した内容だった。

GH ともの家この道 胃ろう造設者に対する QOL 向上への取り組み

H23年2月入居の胃ろう造設者の QOL 向上について、園内行事への積極的参加、自宅や娘さん宅への外出支援等が報告された。H13年(56歳で)うつ病と診断された後、H16年アルツハイマー型認知症、H20年大脳皮質基底核変性症と確定診断されたご本人を在宅介護のギリギリまで支え続けたご家族は、GH入居以降も日参され食事介助をして下さっている。「家族とともに過ごす時間」が QOL に重要な影響を与えることが再確認された事例であった。

GH 溝辺ともの家 医療依存度の高い認知症高齢者の QOL 向上への取り組み

偶然ではあるが、肝硬変と肝性脳症、糖尿病、脳梗塞後遺症(尿崩症・不完全尿閉による膀胱カテーテル留置)、パーキンソン病、舌癌手術(左半分切除)後遺症による嚥下障害、大動脈弁・僧帽弁狭窄閉鎖不全、喘息、慢性呼吸器不全による夜間 NIPPV(人工呼吸器)の装置等、医療的ケアの重要な入居者が集まってしまい、上記テーマが選ばれた。研究発表時には、資料中の入居者3名が故人となられており、QOL 向上の取り組みはターミナルに直結するものでもあった。看護師資格を有する管理者はチームにとって力強い存在であっただろう。「出来ることは全て行い悔いのない取り組みだった」が、職員の医療知識の習得と報連相の重要性(小さな変化や兆候を見逃さない、情報の共有化のために)が指摘されていた。まったく同感である。

GH アンジュールともの家 右大腿骨頸部骨折後の歩行に向けての支援

本年4月、やや不安定な歩行ではあるが日頃から多動で歩きまわられ要注意とマーク

されていた方が、不運にも転倒され大腿骨頸部骨折となった。ご家族は手術ではなく1ヵ月間の絶対安静による骨の癒合を選択された。1ヵ月余のベッド上での生活は「ねたきり」になる可能性大であったが、ご本人の「歩きたい」「トイレに行きたい」訴えから、歩行に向けての支援に取り組んだとのこと。絶対安静から端坐位、立位、歩行訓練へとその都度医師・看護師・訪問リハビリの理学療法士等の指導をうけ、時間をかけて状態の改善を図っていった。左右の足の長さには差ができ、その差解消のための靴をつくったが、自力歩行にはいまだいたっていない。この状態でさらなる転倒のリスクが予想されるため、見守りの強化が必要である。「歩けるようになるのはうれしいけれど転倒の危険がさらに増えるのでは」とご家族の複雑な心情がよせられた。

小規模多機能ホームともの家 介護事故ゼロへの取り組み

事故防止への基本指針、介護事故ゼロへの取り組みに関する誓約書（職員）の作成など、職員への自覚を促しチーム全体で取り組む姿勢を明確にした。又、送迎時のマニュアル・配薬ミス防止策、転倒防止策（転倒の多い人別に原因・時間帯をチェックし個別に立案）と実に慎重かついねいな取り組みであった。これほどの防止策を考えても残念ながら事故は起こったとのこと。しかしながら事故ゼロをめざす真摯さは特筆に価する。

小規模多機能ホーム第二ともの家 困難事例への取り組み

重度の認知症であるが元気で動き回る人の支援と、そのBPSD（認知症の行動心理症状）を受容出来ない職員の温度差解消とチームワークづくりの二つを課題として取り組まれた。入居前施設での情報提供、サービス開始時、開始数ヵ月後、とアセスメントが適時・適切になされていることに感心させられた。速やかなご家族への相談や医師との連携・必要に応じてのケースカンファレンスや職員のミーティング開催。また、本人理解のための24時間生活変化シート・ひもときシート等の活用、ルーチン化療法など、他事業所も学ぶ点が多かったのではないかと。

敬老会を終えて

アンジュールともの家 越智英司

9月16日ともの家の敬老会が催されました。年間を通していろいろある行事の中でもお年寄りが主役になる日です。各事業所から次々にアンジュール2階へ集合されました。男性も女性も普段よりお洒落をして皆さんとても良い笑顔を見せていました。長寿番付表の発表では東の横綱御年98歳吉井さんに続き、西の横綱成井さん御年96歳、以上2名が代表で表彰されました。花束の贈呈とともに温かい拍手が会場を包みます。次に各事業所の紹介です。お一人お一人の写真と趣味や特技が紹介されました。ご自分の紹介に照れる方、ニコッと笑顔を見せる方、「ハイ」と元気に返事をされる方、個

性あふれる表情に会場は和やかな雰囲気になりました。

最後に舞台上で活躍されたプロの役者さんが舞踊をご披露下さいました。華麗な動きに皆さん釘付けです。会場からは「すごいね～」、「きれいですね～」と皆さんとても満足され、大きな拍手に包まれながら今年の敬老会を終えることができました。



ともの家運動会

小規模多機能ホームともの家 赤松富士男

10月18日、ともの家5事業所合同運動会が八白公園で開催されました。「皆さん、張り切り過ぎてこけたりして怪我せんように最後まで…よろしく…」森百十さんのゆとりある選手宣誓。参加者全員によるラジオ体操。紅組(グループホーム)白組(小規模多機能ホーム)に分かれ応援合戦と続き、闘争心を煽られます。フレー、フレー、白組…、エイ、エイ、オー。ガンバレ、ガンバレ、紅組一。学生服を着た応援団長、上岡幸雄さんのおどけた言動に爆笑。

パン食い競争、玉入れと続きます。ひとつ、ふた一つ…、六十、六十二…、白組の勝ち一、バンザーイ、白組2連勝。次は、利用者の家族と職員による綱引きです。紅組にお相撲さん(?)が2人いるようです。盛り上がる応援の中、今度は紅組の2連勝。最終競技は、職員によるリレーです。



「もう少しで抜けそうだったのに」と悔しい声も聞こえてきます。最後に整理体操をして、疲れた身体の手入れをして無事競技を終えました。好天に恵まれる中、利用者や家族の皆さんそして職員が一堂に会して、触れ合い、競い合い、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。皆さんお疲れ様でした。そしてありがとうございました。



秋の遠足

溝辺ともの家 福田清乃

天候の悪い日が続き、延びに延びた秋の遠足、久万高原町ふるさと村。天候は晴れ、そして気温も前日とはうって違って比較的暖かく絶好の紅葉狩となりました。バスのな



かでは、利用者さんの自己紹介、そしてカラオケと盛り上がり、だんだんと久万に近づいてくると、辺りは雪景色！そしてきれいに染まった紅葉。その雪と紅葉のコントラストはなかなかみれるものではありません。みなさん窓にくぎ付け！「きれいね～」という言葉が飛び交いました。これは期待できそうな



予感。そして、さあ、ふるさと村に到着！ したとたん・・・雨・・・。一行は雨宿りのため土産物屋さんへ！皆さん土産物に夢中！久万の名物おくま饅頭を買い。しかし雨は止まず。止む無く昼食会場へ。名物の煮込みうどんをはじめとした豪華な懐石料理。普段小食のお年寄りもぺろりとたいらげました。そしてお腹も満腹になった一行は、残念ながらバスからの紅葉狩とあいなりました。が、それも遠足の醍醐味ではないでしょうか。予期せぬことが起こる。そんな旅こそ面白いものなのかもしれません。



運営推進会議

ともの家この道 崎田憲司

9月25日この道にて運営推進会議がありました。参加者は入居者の方の御家族数名と民生委員や市の介護保険課の方などが集まりました。今回の目玉はなんとといっても普段この道の利用者のお年寄りが使っている機械式のリフト浴とリクライニング車椅子を実際に乗って、使って頂く。ということでした。



まずは先に実際にリフト浴を使って頂いた感想です。「リフト浴というと吊り下げのイメージが強かった。

この様な形の物は初めて見た。他事業所のものを見た事はあったが実際に乗る事はなく良い経験になった」「リフト浴に実際に乗ってみるとみている動きよりもなめらかに動くことが分かった。動くスピードもゆっくりとしていて良かった。浴槽の段差も深くなくて良い」リクライニング車椅子の感想では、「乗り心地がよく大きさの割に廊下での小回りが出来る所が良いが、自分が歳をとった時の事を考えると値段が気になる」

「普通の車椅子に比べて楽」写真を見て頂ければ分かるとおり皆さん初めての体験にとっても興味津々で実際に使用してみても貴重な体験が出来て良かったという声が多数でした。入居者の方々の生活を実際に体験して分かる事は多々あると思います。今回はその意味でもとても良い運営推進会議だったと思います。



シンポジウム「社会福祉の原点と地域密着福祉を考える」に参加して

ともの家この道 乗松守亮

「社会福祉の原点と地域密着福祉を考える」をテーマに、高齢者福祉の長年の歴史から現在までの歩みを学び、本来の社会福祉の原点を考え、今後の課題といった、「過去・現在・未来」の流れで社会福祉について、色々な事を知り勉強させて頂きました。高齢者福祉の歴史からは、明治の施設福祉しかない時代には身寄りの無い高齢者を主に民間慈善家が援助していた事から始まり、これが社会福祉の原点と知りとても心を打たれました。現在でも慈善やボランティアといった、人と人との繋がりが助け合いが大切であり、人が人として幸福に暮らす為には、とても大事なことだと感じました。また、長野県の泰阜村で実際に行っている福祉では、「介護制限額のないサービス」など、過疎地における高齢者福祉のこれからの見本や参考になるような取り組みが沢山あり、とても勉強になりました。必要に応じて必要なサービスを提供、医療と福祉についてなど、色々な話を聴く中で、ここ泰阜村でも村全体での協力とボランティアといった、人と人との繋がりが多く見られました。

今回、このシンポジウムに参加して一番感じた事は、福祉は人と人の繋がりが、助け合い、思いやりが大切なのだと改めて実感しました。それは介護職員で働く私達も同じで、その人が幸福になる為にはどうしたら良いのか？といった気持ちを常に持ち、考え行動する事が必要だと思いました。



「口から食べたい」

ともの家この道 渡部貴子

これは、10月20日伊予医師会、歯科医師会の主催であった講演会の題名です。胃ろうの方が口から食べられるように、医療と介護職のチームアプローチのあり方についての話や、ある老人ホームでの取り組みの発表を聴いたり、専門医の講師の先生の症例、説明や写真を観ながら口から食べることについてを学ぶことができました。

食事をしている時に「楽しみ・喜び・幸せ・笑顔」になるということ、多くの人は実感しているのではないのでしょうか？お腹が空いた時など、私にも思い当たる場面がたくさんあります。

私達、介護職員は患者さんや利用者さんを変えるのではなく、Care（ケア）＝私達のひとり一人が変わることで、多くの人が「生きている幸せ」を感じられるようになるのではないかと考えます。専門医とのチームケアがもっと多く広がれば良いと思います。

講師の先生方のお話もとても面白く勉強になりました。

参加させて頂きありがとうございました。私は介護の仕事が大好きです。



続・介護ひまなし日記②

小規模多機能ホーム第二ともの家 永和里佳子

最近、自分はへそ曲がりだな、と思う。町を歩いていて、「この町に生きて～♪」という郷土愛をうたった曲が流れるとくすぐったくて仕方がない。わかりやすい美談が、この国には受ける。原発の問題より、復興に向けて頑張っている姿のほうがクローズアップされているように。

1999年当時、ともの家の設立目的は「ノーマライゼーションの推進」と「非営利活動に徹する」というものだった。介護保険法制定と同時に営利企業の福祉業界への参入が認められ、“年寄りを食い物にする”者が出てくることは目に見えていた。その中で「利用料はできるだけ低く」設定し、「いかに障害が重くても」受け入れるという理念の元に、資金も後ろ盾も持たないNPO法人としてともの家は誕生した。ホーム長をはじめ、職員は努力して勉強を重ね、心から認知症の方と向き合ってきた。その結果が徐々に認められ、社会福祉法人格が与えられたのだと思う。今でこそ通念となっている“パーソンセンタードケア”（本人らしさを大切にした介護）だが、ともの家ではセンター方式が普遍する以前から、「尊厳ある生活」とは何か、を追求してきた。近年、だれもが「個人の尊厳を守ろう」「その人らしい生活の継続」などと口にする。が、私の中の天邪鬼が、「そんな簡単じゃないだろう」とささやく。たとえば、第2ともの家にはSさんという方がおり、毎日「故郷に帰る」と出ていかれる。ついていくと「変な奴に追いかけている」と助けを求め逃げ隠れする。どこにも受け入れ先のなかったSさんと付き合っただけで1年少し経った今、職員はSさんの表情や態度を見て、「今日は一人で散歩したいのだな」「今日は本当に家に帰りたいのだな」と判断できるようになった。家に帰りたときには、車で自宅やご主人の入院先、父母の墓参りなどにお連れしたり、畑で作業して気分転換したり、一緒に歩いたりしている。以前なら一緒に歩くなど考えられなかったが、今はSさんも心を許してくださり、歩きながらいろいろな話をしてくださる。どんなにSさんが頻繁に出て行っても、鍵をかけることはしない。それは「真の自由の中にしか尊厳は存在しない」と信じているから。自由とは、放任ではない。認

知症を本当に理解していなければ、自由も与えることはできない。どこまでが大丈夫で、どこからが大丈夫でないのか、それは毎日介護している人間にしかわからないし、結局のところ誰にも（本人にも）わからないかもしれない。最後まで責任を持ってその人自身を見る、という覚悟。それがその人とともに生きる、ということではないか。心に寄り添う優しさ、そして信じる力がなければ、尊厳を守ることなどできない。

「行ってきます」と出ていくSさんの後ろ姿に向かって強く祈りながら、今日も笑顔で見送っている私たちがいる。

介護職員からのメッセージ ～主任編～



【小規模多機能ホーム第二ともの家 主任 曾我部則高】

ともの家の一員となり、あっという間に時が過ぎ、4年9か月。前職は介護と全く異なるもので、見ることも聞くことも初めてのなか、手探りで取り組み戸惑いと不安の連続でしたが、上司や同僚に励まされ、家族にも支えられながら今に至っています。

介護という仕事を通じて、たくさんの人と出会い、そして別れ、また出会う…。その方の大切な人生の1ページに関われることを幸せと感じることができるようになりました。第二ともの家で主任という仕事を任されていますが、気持ちはいつも1年生です。後輩職員から学ぶこともたくさんあります。特に、第二ともの家では利用者も職員も差別なく“みんなで”という考え方で進めているので、主任だからと言って特別なことはありません。車の運転と日曜大工が得意なことから、器用そうに見られ、色々なこと（修繕など）を任されてついには今年度、環境委員長という大役まで負うこととなりました。が、華々しい肩書と裏腹に、仕事の中身は砂利を敷いたり、軽トラを運転し廃品を回収したり、という地道な(?)作業です。こんなコツコツした仕事が自分には合っているのでしょうか…。知識や技術を身に着けることは大切ですが、色々な経験を通じて、中身の深い“介護士”になりたいと思う今日この頃です。

●
【溝辺ともの家 主任 山岡理紗】

介護の仕事は、今まで就いたことのある他の職とは何かが決定的に違います。考えた結果、いき着いた答えは「ともに生活する」というところです。お年寄りが生活していくうえで介護が必要なときだけでなく、人間同士または、人生の大先輩として向き合い、お互いの人生の中の登場人物となっているなど感じます。楽しい時、嬉しい時、悲しい

時、不安な時、様々な場面でともに感じられるような存在でいたい。そうなれたとき、介護職員としての役割を果たせているとも思っています。

そしてもう一つ、主任という役割をどうすれば果たせるのか。主任という役割をいただき一年が過ぎました。日々、試行錯誤・四苦八苦・七転八倒…悩んだあげく最近私は「パイプになろう」しかも「パイプのときはなるべく主観を捨てよう」と思っています。お年寄りはもちろん、職員同士も円滑につなげる「パイプ」になりたいと思います。なかなか難しいですが…。これからも何気ない毎日を、皆さんとともに過ごしていくために、学びを大切にしていきたいと思います。介護職員としても、主任としても、人間としてもまだまだ未熟な私を、今後ともよろしくお願いします。

お知らせ

第一回 廃品回収の結果報告

環境整備委員長 曾我部則高

9月末、ともの家第一回の廃品回収を行いました。各事業所職員、本部職員、ご家族等のご協力を得て、当日は滞りなく回収ができました。たくさんの資源ごみが集まりましたが、総額は、期待に反して1818円。内訳は、新聞の550円が一番多く、続いて、雑紙420円、段ボール360円、衣服330円…となっています。アルミが一番単価が高いのですが、キロ数で行くため（1キロ＝40円）80円にしかありませんでした。

今回、ご家族への依頼が遅れたこともあり、まだ廃品回収について知らない方もいらっしゃると思います。この収益は、職員の互助会費として慶弔金などに充てられる予定です。また、利用者の皆さんにも還元していきたいと考えていますので、「ともの家」援助のために多くの方にご協力をお願いいたします。毎月末に行っており、持参困難な方は回収に伺いますので、お気軽に声かけください。

編集後記

愛媛新聞に、県内で行われた福祉用具研修会についての記事が掲載されていました。たしかに介護現場では、いわゆる「腰痛もち」が少なくありません。自分自身の管理でどうにかなるものでもなく、人力で行う介護には無理な姿勢はやむを得ない場合があります。かといって、機器に頼るにも抵抗がないとは言えず…。

介護される側、する側双方にとってよい機器であれば、ぜひ導入をと腰痛もちの私は思います。皆さんはいかがですか？山岡（溝）